

## 病院における安全教育

(分担研究：小児の事故とその予防に関する研究)

研究協力者報告書

水田隆三、清澤伸幸、長村敏生

**要約** 小児の事故予防のための母親の啓蒙・教育については保健所や病院における乳児健診の際に各種パンフレットや安全チェックリストを利用して実施したり、小冊子の配布やメディアの利用、ビデオの活用、講演会の開催などが行なわれてきたが、一般病院における事故予防のための安全教育についての実施とそ成果については報告が少ない。

母親の安全教育について京都第二赤十字病院では目的意識を持った自発的参加形式であって、母親同志が自由に意見交換できる「さわやかママの集い」を開催してきたのでその結果を報告する。

小児の事故発生率については事故の定義、調査方法、対象年齢などによってさまざまであるが、「さわやかママの集い」に参加した母親に対するアンケート調査では事故経験率は36.6%であり、事故予防のための啓蒙・教育の方法として有効なものと思われた。

**見出し語** 事故予防、安全教育、病院での安全教育

**研究方法** 母親の育児不安を解消し、病気についての一般的なことがらを学習し、事故予防につい

ての教育・啓蒙のために、出産後3～4カ月の母親を対象に「さわやかママの集い」を開催してきた(詳細については平成7年度報告書にて報告)。

「さわやかママの集い」をはじめて約4年を経過し、参加者も約350人となったので、6カ月

以上の乳幼児を育てている母親を対象にして、こ

れまでの事故の経験についてアンケート調査を行った。

アンケート発送者は285名(転居先不明:38名)であり、191名より回答を得た(アンケート回収率:77.3%)。アンケートの内容は事故の経験の有無、年齢、性別、事故の種類と部位、発生の場所などである。

## 結果

事故経験率：回答のあった191名中、事故の経験なしは121名(63.4%)、事故の経験ありは70名(36.6%)であったが、調査時点での当該乳幼児の年齢との関係を見れば2歳以上になると両者はほぼ同数となる(表1)。

表1 現在の年齢と事故の経験率

年齢	例数	事故あり	事故なし
1歳未満	50	12 (24.0%)	38 (76.0%)
1～2歳	62	19 (30.6%)	43 (69.4%)
2～3歳	51	25 (49.0%)	26 (51.0%)
3歳以上	28	14 (50.0%)	14 (50.0%)
合計	191	70 (36.6%)	121 (63.4%)

性別：一般的には事故は男児に多い傾向がみられるが、今回の調査では例数が少なく、対象年齢が低いこともあって性別による差はみられなかった。事故を経験した乳幼児の年齢と性別について表2に示した。

表2 事故を経験した乳幼児の性別

年齢	1歳未満	1～2歳	2～3歳	3歳以上
男児	4	7	14	8
女児	8	12	11	6
合計	12	19	25	14

事故の経験回数：事故経験者70名の事故の回数を検討してみると、1回のみが43名(61.4%)、2回が13名(18.6%)、3回が13名(18.6%)、4回が1名(1.4%)であった。

小児では事故を繰り返す傾向が明らかであり、環境の問題、性格や心理状態など事故を繰り返しやすい子供や母親の対策が必要となる。

事故の種類と発生場所：事故の種類としては打撲が最も多く、次いで切傷、熱傷、異物誤飲が多い(表3)。

発生の場所は家庭内が約7割を占め、特に居間、台所での事故が多い(表4)。

## 考察

病院での母親の集い参加者を対象とした調査において2歳未満の事故発生は少なかったが、2歳以上になると約半数が事故を経験している。事故発生率を評価するためほぼ同年齢の乳幼児を対象として外来診療の場において行なった調査結果(京都第二赤十字病院小児科外来、平成9年2月～3月)を表5に示した。

表3 事故の種類（116例、複数回答）

年 齢	1歳未満	1～2歳	2～3歳	3歳以上	合 計
打 撲	19	17	11	5	52 (44.8%)
頭部	11	7	5	2	25
顔面	5	8	5	2	20
その他	3	2	1	1	7
切 傷	6	9	8	2	25 (21.6%)
挫 傷		2	2	1	5 ( 4.3%)
熱 傷	3	7	3	1	14 (12.1%)
異物誤飲	7	3			10 ( 8.6%)
気道異物			1		1 ( 0.9%)
脱臼・捻挫	1	2	1		4 ( 3.4%)
その他	1		2	2	5 ( 4.3%)
合 計	37	40	28	11	116

対照例の事故経験率は 43.8 % (283名中124名) であり、すこやかママの集いにおいて事故予防の重要性を学習した母親において事故経験率がやや少ない傾向がみられた。しかし、対象例数が少なく、病院内での啓蒙教育の具体的な効果については今後の検討が必要となる。

今回の調査において、2歳以上になると事故発生率がほぼ同じであることより、1歳6ヵ月頃に再教育の機会をもつことが必要であると思われる。事故を繰り返す傾向があることより、これらの母親および子供の性格や心理面での検討も今後の課題である。

乳幼児の事故の種類としては打撲が大半を占め、そのきっかけは転倒、転落、衝突である。事故の生場所は家庭内、ことに居間、台所、玄関、階段が多い。

母親に対する事故予防の啓蒙・教育の媒体としては新聞、ラジオ、テレビ、ビデオ、育児雑誌、婦人雑誌、単行本、パンフレット、小冊子、パネル、行政の広報誌などがあり、母親が参加するものでは保健所や診療所、病院、学校教育、講演会、研修会、母親教室、父母の会などの場において事故予防の研修プログラムがくま

表4 事故の発生場所

年 齢	1歳未満	1～2歳	2～3歳	3歳以上	合 計
家庭内	35	23	10	3	71 (72.4%)
居間	24	6	3	1	34
台所	5	4	2	1	12
玄関	2	3	2	1	8
階段		6	2		8
寝室	4	1	1		6
浴室		3			3
店 舗		5	2		7 ( 7.1%)
車 内	1	2	1		4 ( 4.1%)
公 園		1	4	2	7 ( 7.1%)
道 路	1	3	2	1	7 ( 7.1%)
その他			1	1	2 ( 2.0%)
合 計	37	34	20	7	98

表5 対象例の事故経験率

年 齢	総数	事故あり	事故なし
1歳未満	66	15(22.7%)	51
1～2歳	84	33(39.3%)	51
2～3歳	75	36(48.0%)	39
3歳以上	58	40(69.0%)	18
合 計	283	124(43.8%)	159

れているが、母親に接する機会が最も多い乳児健診、一般外来診療の場を利用することが最も効果的と思われるが、時間的な制約がある。

病院内における母親教育の場として母親の集いを約4年間行なってきたので、事故予防の効果についてその結果を簡単に報告した。

文献 水田隆三：病院における事故予防のための安全教育について、厚生省心身障害研究、生活環境が子供の健康や心身の発達におよぼす影響に関する研究、平成7年度報告書、P133.



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 小児の事故予防のための母親の啓蒙・教育については保健所や病院における乳児健診の際に各種パンフレットや安全チェックリストを利用して実施したり、小冊子の配布やメディアの利用、ビデオの活用、講演会の開催などが行なわれてきたが、一般病院における事故予防のための安全教育についての実施とそ成果については報告が少ない。

母親の安全教育について京都第二赤十字病院では目的意識を持った自発的参加形式であって、母親同志が自由に意見交換できる「すこやかママの集い」を開催してきたのでその結果を報告する。

小児の事故発生率については事故の定義、調査方法、対象年齢などによってさまざまであるが、「さわやかママの集い」に参加した母親に対するアンケート調査では事故経験率は36.6%であり、事故予防のための啓蒙・教育の方法として有効なものと思われた。